

2015年12月1日(火)、中央図書館ラーニング・スクエアでラーニング・アドバイザー(LA)によるセミナー「伝わる研究のアウトプット術」が開催されました。自分の研究成果を発表する上で、それぞれの場面にに応じてできる工夫や注意点など、セミナーでお伝えしたかったポイントをダイジェストでお届けします!

## ゼミ・研究室で

### 研究のアウトプット術 ～ゼミ報告篇～

NAGAO システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻

私の研究室の場合、教授と学生が対面で会ったり、同じ研究室に所属している学生と教授が集まって報告会をします。ゼミ報告では同年代の学生と、自分の研究を良く知っている教授が同席します。しかし、同じ研究室の学生だからと言っても、報告が全て伝わるとは限りません。やはり効率よく賢い伝え方が必要になります。



私は以下の三つの方法を挙げました。1) 自分自身が研究をどこまで理解できているのか? 現在地から目的地までのプロセスを把握しているのか? その**把握**から始めましょう。話し手と聞き手の間で誤解が生まれにくい必要です。2) 相手に説明するときは**筋道を立てて**話しましょう。論理展開の基本となる「動機・目的」「研究方法」「結果」「考察」の論理展開はしっかり抑えておきたい大事なポイントです。3) **言いたいポイント**を一つに絞ることで、あれこれ成果を述べても、相手からすると結局何が言いたいのか分からなくなってしまいます。自分の一番伝えたいこと、相手が一番知りたいことを伝えましょう。以上のことをまとめると、「**自分の研究に対して相手が知りたいと思っている疑問に、的確に答える**」ことがアウトプットする上で大切なことです。



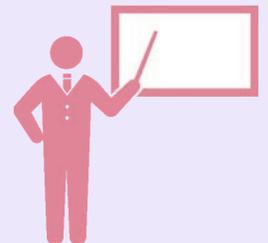
### 学会発表、ここに気をつけてアウトプット!

## 学会発表で

KURIHARA 人文社会科学研究科 哲学・思想専攻

「学会発表」、緊張しますよね。でも、少しでも分かりやすい発表ができるよう準備しておけば、心に余裕ができるはず。私からは、哲学を研究してきた経験を基に、いわゆる「文系的な」研究発表をする際に工夫できそうな以下の三点を提案しました。

(1) 冒頭(「はじめに」)で発表の**主題**となる「**問い**」を面白く表現することが、発表を聞いてもらえるかどうかの肝になります。そこで、その「問い」について考える意義を、より一般的な文脈から説明しておく(例: この「問い」について考えることは、実は〇〇ということについて考えることなんですよ等)ことが効果的です。(2) また、専門用語を使うことは学会発表では避けられません。ただ、発表のなかで鍵となる用語については「学会だから伝わるだろう」と思わずに、**しっかりと噛み砕いて説明**することが必要です。(3) そして、「分かりやすい発表」のためには、**提示の「仕方」**も疎かにはできません。簡潔な文章を書く、見やすいレジュメを作る、はっきり話すといったことに気を配るだけで、発表の印象はがらっと変わります。聞きやすい速さで喋っても発表時間をオーバーしないか、事前にチェックしておくのが得策でしょう。



## 魅力ある 発表のために

### アウトプット as 大喜利: 学際的研究の提示策

OYAMA 人文社会科学研究科 国際公共政策専攻

研究成果の有する含意が多様な学問と絡んできた。せっかくなら魅力ある形で人目を惹くように提示したい。ならば、この成果はどこに投稿したらいいのだろう...? これは学際的研究において直面する悩みの一つでしょう。こうした悩みに対する向き合い方の一例を紹介しました。

そもそも「学=ディシプリン」とは何か。現存する「学」の区分は歴史的に形成されたもので不動の区分ではありません。とはいえ、そうした区分は広く世に根付いています。自分の関心領域を重んじながらも「学」を利用できないか――。

ここで参考になるのが**大喜利**です。大喜利における笑いの構図《①問い-回答の妥当性、②通念を崩す意表性、③既出の回答との兼ね合い》を敷衍しようという発想です。ただし、研究のアウトプットは実際の大喜利とは異なります。アウトプットを試みる時点で回答の幅(=研究成果)が定まっているからです。そのため**回答する幅を見極めながら、最もウケそうな問い掛けや報告の場、成果を据え置く文脈などを逆算/創出していく流れ**になります。こうして捻出した組み合わせの中から**最もウケそうなものを選択**しようというわけです。「学」に身構えすぎず、大喜利気分を楽しめるといいですね!

